



鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第31号

2008年1月10日

鎮守の森の再発見

NPO法人社叢学会 理事長・京都大学名誉教授
上田正昭

“新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事”。地球温暖化のためか、丹波亀山(亀岡)でも、初春の雪はここ数年お目にかかったことはありません。

昨年(2007年)の11月17日、国連の潘基文事務総長は、統合報告書を承認したIPCC(「気候変動」に関する政府間パネル)の総会を締めくくる挨拶の中で、「世界の科学者たちが声を一つに合わせた、次は世界の政治家たちの番だ」と訴えました。「統合報告書」は、世界の科学者の研究成果をもとに、温暖化についてIPCCが1990年以來、ほぼ5年おきにまとめてきました評価報告書の中核となる文書です。

「統合報告書」では、「適応策と削減策のどちらか一方だけでは影響を防ぐことができない」として、二酸化炭素(CO₂)の排出削減対策だけでなく、温暖化の影響を避ける適応策の重要性を、これまで以上に強調しています。

地表の平均気温の上昇幅は、年々高くなっていますが、1909年～99年の平均気温よりも1.5度～2.5度を超えると、生物の多様性への悪影響はさらに顕著となり、例えばサンゴの種は全滅し、上昇率2度前後が限界であると指摘しています。

1972年にスウェーデンのストックホルムで開催されました国連の人間環境会議をはじめとして、「気候変動枠組み条約」や「生物多様性条約」など、国連は地球の環境保全のために重要な条約を採択してきました。そして

1997年の12月には、いわゆる「京都議定書」を決定しました。しかしCO₂の最多輩出の大国が今もなお非協力であり、このたびの「統合報告書」でも、CO₂の排出が減少に転ずれば、どのようなよい影響が生じるかを示すことに、大幅削減を課せられることを懸念する排出三大国は反対しました。

科学者の中にさえ、「国益」重視の反対意見があります。そして世界の政治家が、「声を一つ」にすることは容易ではありません。私どもは今こそ自然との共生と調和の中で、縄文時代以來守り活かしてきた鎮守の森の歴史と伝統を、日本国内ばかりでなく、世界に向かって発信してゆく必要があります。

2002年の5月26日、京都の賀茂御祖(下鴨)神社の糺の森で創立しました社叢学会は、本年の6月7日、島根県出雲市の出雲大社で第7回の年次総会と研究大会を開催します。2000年の出雲大社境内発掘調査で姿を現しました岩根之御柱(心の御柱)・宇豆柱・南東側柱は、いずれも直径3メートルを超える豆柱であり、心の御柱の下から出ました杉の板材の年輪年代測定では、1227年ごろの伐採であることが確かとなりました。高さ16丈(約48メートル)の巨大神殿のありようは、県立古代出雲歴史博物館展示の宇豆柱にもうかがわれます。その出雲大社での年次総会と研究大会は、必ずや鎮守の森の再発見に寄与するに違いありません。



下鴨神社糺の森の景観変化と 江戸中期の森の維持管理

話題提供：今西 亜友美（京都大学地球環境学堂
森川里海連環学（ア・ネット・ホー・レーション）分野）
コメンテータ：小椋 純一（京都精華大学人文学部教授）
コーディネータ：森本 幸裕（京都大学教授・社叢学会理事）

鎮守の森は古くから保護され、原植生を残していると考えられているが、1970年代の滋賀県での調査結果をみると、必ずしもそうではなく、意識的に鎮守の森の保護が始まったのは明治時代であろうと思われる。とはいうものの、鎮守の森はその地域の潜在自然植生を現しているということは言えるだろう。

ここでは下賀茂神社の古絵図と文書から読み取ることのできる下賀茂神社の姿を見ていく。下賀茂神社は官幣大社で、1983年には史跡に指定され、1994年には世界遺産に登録された。現在、糺の森にはクスノキが多くみられるが、これは1934年の室戸台風と35年の大水害以降に植栽されたものである。2001年に毎木調査が行われた結果、優先種はムク、エノキ、ケヤキという河畔林の特徴を示した。江戸から明治にかけての下賀茂神社には松があったと見られるが、大山寺（神戸市）の花粉分析からわかるように、西日本の常緑林は恒常的に資源利用されてきたアカマツ林から遷移したものだと考えられている。

古絵図からみる下鴨神社の姿 江戸時代の絵図を時順に追ってみると、1658年のものには松のほかに広葉樹も見え、これらが混成していたと思われる。1679年になると、松、広葉樹らしきものに加えて杉が見える。1689年には泉川東側に森が描かれており、加茂川横と河合神社南部に竹が描かれていて、竹林をなしていたことがわかる。

1780年代に入ると松タイプの樹木と広葉樹が主なものになるが、本社裏には杉の木が見える。1786年のものには松らしきものと川の東側に竹タイプの林が描かれ、加茂川と高野川の合流地点にも竹が描かれている。1799年になると杉、松に広葉樹の混じった林となっており、本社北には杉がみられ、南には竹林があったと思われる。

文書からみる下鴨神社の姿 これらの林の資源利用については、下賀茂神社の社家の日記によって詳細を知ることができる。取り上げた年代は17世紀後半

(1678・79年、81～91年)と18世紀半ば(1748～57年)で、勘定帳から植物に関わる記述を抽出した。

まず、1678・79年には、本社・河合神社で竹を多く伐採し、入札したことがわかるが、これは1677年に遷宮があったためと思われ、これらの経緯は普請奉行に申請されている。また、79年には洪水で倒れた木を入札によって処分している。

1681～1691年でも、竹を伐採したという記述が目立ってくる。これは堤防用に利用したためと思われるが、7月には竹の皮・竹の子を売却している。さらに折れた榎を売り、借銀の返済と日常の消費に使ったという記述も見える。

18世紀半ばになると、枯れ松を売ったという記述が毎年のように出てくる一方、竹を大量に伐採し、建築資材として利用したことが伺える。松は枯れたり、倒れたりしたときに売ったり、利用したりし、竹は伐採して利用する重要な資源であったようだ。このほか、団栗、榎、川端の柳などは薪にも利用されている。下刈りは10月・11月に定期的に行われており、余剰金は氏人預かりとなっていた。また、南天、緋寒桜、夾竹桃を購入したという記載も見え、これらは植栽されたものと思われる。また、栗や桐を購入して植えたこともわかっている。このほか、杉、松を購入して建築材としていることから、森の木を伐採して使うことはなかったということがわかる。

明治以降の景観の変化 明治維新になって、神社の世襲制の廃止や伐採禁止令が出され、神社の氏人によって守られていた森の管理体制が、資料が見つからないので詳細はわからないが、大きく変わったと思われる。さらに昭和9年・10年の災害とその後のクスノキの植栽によって、それまでは松が育つニレ科の落葉樹の明るい森だったのが、林床が暗くなったためにマツの更新が行われなくなり、景観が大きく変化したのではないだろうか。今後も、糺の森がどのように変わっていくのかを注視していきたい。

次回予告【第29回関西定例研究会】

- ◆日時：2008年1月26日(土) 13:30～15:30
- ◆場所：ビル・葆光5階 楽天の間（京都市中京区室町御池西南角 TEL075-211-4171）
- ◆テーマ：絵図・地図からみた身近な森林景観の変化—社寺林・陵墓・里山—
- ◆講師：鳴海 邦匡（大阪大学総合学術博物館 助教）
- ◆コメンテータ：小椋 純一（京都精華大学人文学部教授）



社叢空間を軸としたマチづくりの構想

講 師：藺田 稔（京都大学名誉教授・社叢学会副理事長）
コディネータ：茂木 栄（國學院大学准教授・社叢学会理事）

前回の研究会発表、藤田直子氏の「社叢空間を軸とした都市緑地の展開」を享けて、中世以来の伝統的な集落形態と鎮守の森（社叢）、そして社叢文化を活かしたマチづくりの構想を提案する。現在の都市生活域における社叢空間を軸とした家郷社会再構築の可能性を探る。

冒頭に社叢学会一愛・地球博出展作品「森と現代文明」『日本は森の國』（2005年制作）を上映し、産業廃棄物の不法投棄等のケースを通じ、鎮守の森を中心とした日本の伝統的なコミュニティ景観が現代都市文明の犠牲になっている具体的状況を確認した。全国的に進行し続ける無計画で没個性的な都市計画は日本古来の伝統的な家郷原理を軽んじ、本来日本人が暮しの中で手入れし守ってきた身近な森は蔑ろにされ、遠い林は守るべきといった倒錯的な総論賛成・各論反対の意識が蔓延してしまっている現状がある。

宗教社会学的には、①中世から近世にかけて村落共同体の持つ共同主観（Cosmology）、②それらのまとまりのある世界観を具体的に示す神社や神体山等の象徴的な個別のもの（Symbolism）、③祭によるそれらの体現化（Performance）という特徴を兼ね備えた家郷社会（Local Culture）が日本の伝統文化を主体的に構築してきた。しかし近代文明化（Civilization）が共通で普遍的なパターンを強制し、日本独自の伝統的な家郷社会を破壊してきた。まさに社叢学会は、それらの現代社会の現状に「文化性（空間的意味）をもつ森林、つまり社叢（鎮守の森）文化をどのように再構成し、守り、現代社会に活かし、そして未来に伝えてゆくか？」を示唆すべく設立され活動している。

社叢（鎮守の森）は、森羅万象に神の息吹を感じた日本人により神聖なる空間として捉えられてきた。本来「上」と「神」とは山や谷の奥まった上源とそこにひそむ隠れた霊性とを混在的に示す古語であった可能

性があり、神の名義が日本の山の風土にひそむ隠れた生命的霊性を語源的に指示している。そのことは世阿弥『風姿花伝』の「秘すれば花なり」に表される「隠された表現」に通じるものであり「秘」は日本文化の核を形づくってきたといえる。比較宗教的には本来「見せる神々」であったはずの仏の影響を受け、神の依り代に替わり神が形造られる。反面、姿を持つ仏が神の性格を帯びて秘仏化し、ご本尊は厨子に納められ、その姿を隠すようになった。そして日本の神のように特定の祭日＝縁日のご開帳にしか姿を現わさなくなった。

中世以来の日本の伝統的な集落景観には稲作に必要な水源からの水の流れと確保が山宮一里宮一田宮という垂直軸によって投影されている。この垂直軸が顕在化するのには、山から神を迎えて行われる非日常的な祭の時である。この垂直軸（信仰軸）と家並み・街道という日常的な水平軸（社会・経済軸）によって立体的な街村集落（紐状集落）は構成されており、西洋的な広場村中心のコスモロジー（聖俗固定）に対して、普段俗の世界（ムラ）が祭祀により聖に変換される（マチ化）という周縁＝奥のコスモロジー（聖俗変換）において、本来の見えざるもの（透明な秩序）の顕在化が成立している。

この伝統的な家郷社会原理を生かしたマチの再開発計画の実践事例として、埼玉県深谷市の森林都市計画構想の為の資料を紹介した。これは深谷宿の街道筋と瀧宮神社を中心とした伝統的な集落原理を守り、またそれを活かし本来の文化性のあるエコロジカルな水利景観を持つコミュニティ（Social Ecology）を再現することにより、社叢が現代から未来への希望を紡ぐ存在として重要な役割を担うことを示唆し、伝統的な集落原理を積極的に活かしたマチの再開発を提案する。

文責：佐々木百合子

次回予告【第29回関東定例研究会】

- ◆日 時：2月16日(土) 14:00~17:00
- ◆場 所：國學院大学渋谷キャンパス 120周年記念1号館4階 1402教室※
(東京都渋谷区東4-10-28) (※教室は変更の可能性あり)
- ◆テーマ：東京臨海部の森づくり
- ◆講 師：樋 渡 達 也（文化財指定庭園保護協議会会長）
- ◆コディネータ：坂 本 新太郎（社叢学会理事）

※なお当日1300~1335 同じ教室にて下記上映会を開催いたしますので併せてご参加ください。

「森と人の歴史」（森のちからシリーズ3、平成8年制作31分）

主催：國學院大学現代GP環境教育プログラム 共催：社叢学会

事務局から

- 謹んで新春のお慶びを申し上げますとともに、会員の皆さま方のご健勝をお祈り申し上げます。関西地方では大晦日になって厳しい寒さに見舞われ、元旦はそれこそ身の引き締まるような冷え込みで、この寒さこそが当たり前なのだと、渴を入れられた思いがいたしました。「温暖化」の中で、鎮守の森からいささかなりとも声をあげ、何らかの实践活动を始めていければと存じております。本年も何卒よろしく学会活動にご協力賜りますようお願い申し上げます。
- 年次総会は下記のとおりです。例年通り研究発表者を募集しております。奮ってご応募下さい。出雲は神話のふるさと、多数のご参加をお待ちいたしております。
- 関東支部を移転いたしました。新住所は下記です。なお、電話、faxは変更なしです。

- いよいよ2月に社叢インストラクター認定試験を実施することになりました。目下、試験問題の作成など、検討委員が詳細を詰めております。ご関心の向きは事務局までお問合せ下さい。

編集後記

今回も一言！ 年末恒例！理事忘年会で、今年も豪華景品が当たる！！福引を決行！ 年末ジャンボ宝くじを入れよう！と思って買いに行ったのに“販売は昨日まで！”だって。え、当たたらフジオカが1割、学会が1割貰おうと思ったのになあ。。。一攫千金のユメが、、、嗚呼。ちなみに豪華景品！の一端をご紹介しますと、干支模様（ミッキーマウスみたい！）飴でしょ、年末大掃除用エプロンでしょ、お散歩用のしょうちゃん帽でしょ、300円で買った3億円ガムでしょ。小学生のプレゼント交換か！？（藤岡 郁）

年次総会の概要

◆日 時：2008年6月7日(土) 10:00~19:00

◆場 所：出雲大社社務所研修室

◆スケジュール：10:00~10:45 年次総会
11:00~12:30 研究発表会
13:30~17:00 シンポジウム

基 調 講 演：上 田 正 昭・社叢学会理事長（京都大学名誉教授）

パネリスト：上 田 篤・社叢学会副理事長（京都精華大学名誉教授）など

17:30~19:00 懇親会（要参加費：1人=3,000円）

※ 大会翌日の8日（日）には、日御碕や上田理事長が名誉館長を務める島根県立古代出雲歴史博物館などの見学を計画しています（有料）

入場無料

神話の国でお会いしましょう！

研究発表者募集！

テーマ：社叢に関する理論的研究
社叢の保存・拡充に関する実践的調査研究
発表時間：20分（報告15分+討論5分）
応募締切：2008年3月末日必着
応募要領：住所・氏名を明記の上、発表内容を300~400字にまとめ、E-Mail、FAX、郵便で本部事務局に送付

* 応募者多数の場合は担当理事で協議し、4月中旬までに諾否をお知らせいたします。
* 発表者は、発表当日に配布する資料を4月末までに本部事務局にお送り下さい。

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL 075-212-2973 FAX 075-212-2916
URL <http://www2.odn.ne.jp/shasou/> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp
社叢学会関東支部 〒141-0031 東京都品川区西五反田1-10-8-415
TEL 03-5875-8423 FAX 03-5875-8321 E-Mail shasou@macrovision.co.jp